

## 学生の卒論から

日本語表現学・日本語教育ゼミ

2023年度 担当 平高史也

亀山裕暉「『日曜討論』に見る政治家のフィラー」は、NHK 総合テレビの「日曜討論」のうち政治家のみが登場した2022年11月から翌年6月までの10回を対象として、出演者の発話に現れたフィラーを扱ったものである。分析の結果、日常生活における談話を対象とした先行研究とは異なり、政治家の発話には「まあ」と「えー」が頻出すること、与党議員の方が野党議員より慎重に言語を編集するためかフィラーの出現数が多いことなどを明らかにしている。そして、「まあ」の頻出の原因を、党や自分の経験、独自の見解を語り、意見を表明する優位性と、主張を和らげ視聴者に攻撃的な印象を与えない配慮の現れとしての曖昧性に、「えー」については、直前の語末の母音の影響、および視聴者に誤りを伝えないように留意する姿勢にあるとする。政治家のフィラーを取り上げた新規性、談話の丹念な分析、言語、社会、心理など多様な面からの考察が評価される論考である。

日本語学ゼミ（現代語）

2023年度 担当 松浦照子 漆谷広樹

田村滉邦「優先度の低い情報を表す語の研究」を紹介する。本論は、文化庁令和3年度「国語に関する世論調査」でも扱われている「なにげに」と、これに加えて「さりげに」及び「地味に」を「優先度の低い情報を表す語」とし、述べたものがある。これらの語について、現代日本語書き言葉均衡コーパスやX（Twitter）から用例を収集し、分析・考察を行っている。「なにげに」と「さりげに」の使用状況の変化、また各語の用法から、いずれも「目立たない情報」であると表することに共通点があり、自己の主張を控えめに

する意図を持つ表現であることを示し、これが若者言葉の方向性と一致しているため多用されたと捉えている。「なにげに」と「さりげに」とが混同していく過程について詳しく述べた点や、先行研究の知見を踏まえ、類語と比較しながら、各語の使用状況を適切に分類し論じている点が評価される。

日本語学ゼミ（古典語）

2023年度 担当 和田明美

中島一彰「『源氏物語』における「頼もし」について―「頼む」「頼もしげ」との関連からを紹介する。本論は、『源氏物語』の「頼もし」に関する語義研究であるとともに、「頼もし」から『源氏物語』の表現を精確に読むことを目指したものである。特に主体・対象や共起語・対立語等の観点から考察を加え、「頼む」や「頼もしげ」と比較しつつ論じた点に特色がある。動作作用を表す「頼む」、心情や状態を表す「頼もし」、外面の様子を表す「頼もしげ」の派生関係や品詞としての役割にも注目しながら緻密な分析を行い、信頼や庇護等に着目して『源氏物語』の男女関係・信頼関係を読み解いている。また類義関係にある「頼もしき人」と「頼もし人」との差異に迫り、中の君にとっての「頼もし人」である薫の存在、さらに「頼もし」とされる男性に振り回される女性たちの苦悩を解き明かした点に特色がある。語義研究の成果を一步進め、「頼む」から派生した語をもって人間関係を読み解いた点で高く評価される。

日本近現代文学

2023年度 担当 藤井貴志

三三

成田響「武田泰淳「ひかりごけ」論―第四の壁と読者の立ち位置―」

武田泰淳による短篇「ひかりごけ」（『新潮』一九五四・三）は、北海道を訪れた〈私〉が現地の中学校長から太平洋戦争末期にペキン岬で起こった人肉食事件の話を書く紀行文風の前半と、その話に魅了された〈私〉がこの事

件を素材として二幕形式の〈読む戯曲〉に仕立てた後半とによって成立している。戯曲部分へ入る直前、読者は語り手から〈読者であると同時に、めいめい自己流の演出者のつもりになって〉戯曲を読むことを求められるのだが、〈演出者〉としての役割を与えられることによって読者の立ち位置はどのように変化するのだろうか。この卒論では、戯曲形式の持つ特性や構造に着目し、舞台と観客を隔てる「第四の壁」という演劇上の概念を導入しつつ分析が進められた。人肉食事件という衝撃的なテーマに引きずられがちであった従来の先行研究に対し、戯曲と小説の形式的な差異を前景化してテキストに迫った卒論である。

日本古典文学

2023年度 担当 空井伸一

福岡駿哉『堤中納言物語』の研究―「二人妻説話」の比較を通じて―

本研究は、平安後期に成立した短編物語集『堤中納言物語』の一篇、「はいずみ」を対象とし、「二人妻説話」という話型の共通する先行作品、『伊勢物語』二三段「筒井筒」との比較を通じて、「はいずみ」が何を描こうとしたのかを考察するものです。

福岡さんは、「筒井筒」では古妻の心情が夫に理解されることによって復縁が果たされるのに対して、「はいずみ」では、夫は二人の妻の真意を汲むことのないまま結末を迎えており、そこにこそ作品の要点があると分析します。

従来の理解では、「はいずみ」のこのような断絶、すれ違いについて、例えば新妻の愚かな失態を笑う滑稽譚の要素として読まれるところがありました。本研究はそれに対し、一見分かりやすい笑話のように思われる成り行きの中に、実は理解されることなく悲しみに暮れる女性の悲哀が潜むことを分析し、「はいずみ」研究に新たな観点をもたらしたと評価できます。